

## 1800年までのヨーロッパの文献にあらわれた伊勢地方

大河内 朋子

**要旨** 主としてKapitza『ヨーロッパにおける日本』（1990年）に依拠して、1800年までの時期にどの程度の伊勢地方の情報がヨーロッパに伝えられていたのかについて報告する。同地方に関する情報量は、鎖国以前の時代を含めても多くはなく、情報の種類も限定されている。その大半は東海道筋の宿場町に関連しているか、または神道に関する解説文の中に出てくる。

東海道筋の宿場町に関する主たる情報源は、イエズス会士、Kaempfer、Thunbergであり、三者とも実際に東海道を往来した。イエズス会士は伊勢地方の政情や戦況を伝え、Kaempferは判断や評価を差し控えた人文主義的な観察態度で詳細な地誌的な記録を残し、Thunbergは医師としていただいた公衆衛生への関心に添って見聞録を著した。

伊勢神宮に関しても上記三者が情報源である。特にKaempferは文献中心の研究方法を採用したために情報量が豊富で話題が多岐に渡り、その結果Thunbergに至るまでKaempferを越える者は出なかった。Kaempferによる神道や浄・不浄、伊勢参りに関する記述は、ArgensやClaudiusがヨーロッパでの宗教論争に利用するところとなった。

1990年にKapitzaによる『ヨーロッパにおける日本—マルコ・ポーロからヴィルヘルム・フォン・フンボルトに至るヨーロッパの日本に関連する知識についてのテキストと画像資料』<sup>1</sup>と題する3巻の資料集が出版された。これは第1巻がA4判957頁、第2巻が同1024頁もある大冊であり、更にそれに加えて、ローマ字綴り漢字対照表や地名、人名、事項の詳細な索引と歴史年表からなる1巻が添付されている。この資料集は、副題にあるとおり、文字テキストと画像資料（原書の扉や本文頁の写真、版画、絵画、地図など）、そして編集者による文献解題で構成されていて、多様な媒体を介して伝達された当時の日本情報を、いわば枝分かれした「地下の水脈」<sup>2</sup>を追うようにして渉猟し、集大成した労作である。収録された文献の数は第1巻が225、第2巻が237、合計462にのぼり、最古の文献（1298年から1299年に口述されたマルコ・ポーロ『東方見聞録』）と最新の文献（1826年のヴィルヘルム・フォン・フンボルト『ロドリゲスによる日本文法の補遺』）の間には528年に及ぶ時間的な隔りがある。文字テキストの紹介の仕方は、該当部分全体を完全に引用するか、あるいは一部分を抜粋するという形になっている。

さて本稿では、主としてこのKapitzaによる資料集を利用して、伊勢地方の情報がどの程度ヨーロッパに伝えられていたのかについて報告したい。<sup>3</sup> もちろんヨーロッパ人の著者たちの関心が、日本という国全体や民族に向けられていたことは言うまでもなく、伊勢という一地方に焦点を当てて記述した者はいない。伊勢地方は、日本全体について記述する過程で必要に応じて言及されているに過ぎないし、鎖国以前の時代を含めても、同地方に関する情報量は決して多くない。そのうえ地誌的な情報というのは、日本に関する情報の一つのジャンルを形成するに過ぎず、動植物、民俗、言語、宗教等地域と関係しにくい重要で膨大な量の情報をほとんど洩らしてしまう。従って伊勢地方に関してヨーロッパに伝えられた情報が、日本に関連

するヨーロッパ人の知識総体の縮図であるとは確かに言えはしない。しかし伊勢地方に関連する情報を調べることによって、来日したヨーロッパ人が日本について何を目撃し伝聞し伝達しえたのか、そうした直接的な情報がヨーロッパ大陸に流れ込み「地下の水脈」となった後、いっどこでどのような形で地表に湧き出たのかについて、具体的な一例として示すことになる。

## 1 利用した資料

まず補巻の地名索引を利用して、伊勢地方に関連した記事の含まれている資料を抽出した。<sup>4</sup> 抽出した資料を、それが作成ないし発行された年代順に並べると、次のようになる。

1. Fernão Vaz Dourado の世界地図（1568年、ゴアで作成）
2. Diogo de Couto 『アジア』（1612年、リスボンで発行）
3. Gothard Arthus 『東洋のインド 第9部—1607、1608、1609年に、Peter Wilhelm Verhuffen の指揮のもと、9隻の大型船と4隻の小型船で、東洋のインドへ、ホラント人とゼーラント人によってなされた旅の短い記述を含む』（1612年、フランクフルトで発行）
4. Arnold Montanus 『日本の様々な皇帝へ派遣されたオランダ東インド会社の記憶すべき使節団』（1669年、アムステルダムで発行）
5. Erasmus Francisci 『外国民族の歴史・芸術・道徳を写す新たに磨かれた鏡、特に中国人、日本人、ヒンドスタン人、ジャワ人、マラバル人、ペグー人、シャム人、ペルー人、メキシコ人、ブラジル人、アビシニア人、ギニア人、コンゴ人、アジア系タタール人、ペルシャ人、アルメニア人、トルコ人、ロシア人、そして部分的にはもっと多くの他の民族について』（1670年、ニュルンベルクで発行）
6. 『日本、シャム、朝鮮という3つの強大な王国についての本当の記述、並びに仮報告で知らせたもっと多くの他の事柄。Christoph Arnold による新たな注と美しい銅版画によって増加され、改良され、飾られている。さらに1644年に殊勝にも引き受けられ1653年に幸運にも終了したヴィンスハイムの Johann Jacob Merklein による東インド旅行を添付する。必要不可欠な索引付』（1672年、ニュルンベルクで発行）<sup>5</sup>
7. 『ユダヤ人と異教徒の驚異の寺院、そこでは彼らの神と偶像の礼拝が始められ、そして見られる。当初 Alexander Ross により英語で記されたが、今では David Nerreter により改良され、多数の補遺が増加され、詳述された』（1701年、ニュルンベルクで発行）<sup>6</sup>
8. Engelbert Kaempfer 『日本誌—かの帝国の往古並びに現在の状態と政体について、その寺院、宮殿、城、その他の建築物について、その金属、鉱物、樹木、植物、動物、鳥、魚について、聖職の及び世俗の皇帝の年代記と継承について、原住民の原初の血統、宗教、慣習、製造品について、そしてオランダ人及び中国人との交易と通商についての報告。並びにシャム王国の記述』（J. G. Scheuchzer による英訳2巻本、1727年、ロンドンで発行）<sup>7</sup>
9. Jean-Baptiste Boyer d'Argens 『中国書簡、あるいはパリの中国人旅行者と彼の中国の文通相手との間における、哲学的、歴史的、批判的往復書簡』（6巻、1739/40年、ハーグで発行）
10. Matthias Claudius 「予約注文者諸氏への講演」（『ヴァンツベックの使者』第3部所収、1778年発行）
11. Carl Peter Thunberg 『1770年から1779年にかけてのヨーロッパ、アフリカ、アジアの

旅』(4巻、1788/93年、ウプサラで発行)<sup>9</sup>

Kapitza の索引から判明した以上の文献に加えて、

12. 「イエズス会のパードレ及びイルマン等が日本より書き送りたる書翰の第二編」『日本・シナ両国を旅行せるイエズス会のパードレ及びイルマン等がインド及びヨーロッパの同会会員に贈りたる1549年より1580年に至る書簡』(1598年、エヴォラで出版) 所収<sup>9</sup>

も利用した。第2編には1581-1587年の通信が収められている。

さてこの12種類の文献の著者ないし制作者のうち、実際に日本へ渡航して来たのは、『3つの強大な王国についての本当の記述』の François Caron (ca. 1600-1673)、『日本誌』の Engelbert Kaempfer (1651-1716)、『ヨーロッパ、アフリカ、アジアの旅』の Carl Peter Thunberg (1743-1828)、そして『日本年報』のイエズス会士たちだけである。ただし、このうち、『3つの強大な王国についての本当の記述』中の伊勢地方の記事は、後年の編者 Christoph Arnold による注記の中にあり、Caron による直接的な目撃情報に基づいて書かれているわけではない。従って、イエズス会士による報告と Kaempfer (1690年9月24日から1692年10月29日まで滞日) 及び Thunberg (1775年8月13日から1776年12月3日まで滞日) の著作だけが、日本での実地見聞や情報収集、植物採集等に基づいて、その当時最新のかつ基本的に正確な事実をヨーロッパに伝えたのである。それに対して、他の著者・制作者はこうした一次資料を編集し加工して、そこから二次的な資料を作り出している。例えば、Vaz Dourado はインドのゴアで、おそらくイエズス会士から得たであろう知識に基づいて、色彩豊かな日本地図を描いたのであるし、<sup>10</sup>『東洋のインド 第9部』の著者 Arthus (ca. 1570-1630以降) の基礎資料はオランダ東インド会社員のメモ書きであった。Montanus (1625-1683) の大著『オランダ東インド会社の記憶すべき使節団』の場合にはオランダ使節の記録類やイエズス会士の書簡などが利用されているが、この Montanus の著作は更に、同時代人の Francisci (1627-1694)『外国民族の歴史・芸術・道徳を写す新たに磨かれた鏡』や Arnold によって直ちに再利用されている。<sup>11</sup> Kaempfer の遺稿となった『日本誌』も、Argens (1704-1771)『中国書簡』や Claudius (1740-1815)「予約注文者諸氏への講演」が利用した資料の一つになっている。<sup>12</sup> このように、イエズス会士の報告や書簡、オランダ東インド会社の記録類、Kaempfer の草稿などが原資料となって、二次的、三次的な日本関連の文献を生み出していることが分かる。

12の文献原書はポルトガル語、ドイツ語、オランダ語、英語、フランス語、スウェーデン語で書かれているが、出版後翻訳されたものも多い。オランダ語で書かれた Montanus『オランダ東インド会社の記憶すべき使節団』(1669年)は、オランダでの出版と同年に独訳が出ているし、英語版の Kaempfer『日本誌』(1727年)も、1729年に仏訳とオランダ語訳、1733年に再度オランダ語訳、1749年には独訳というように、次々と各国語に翻訳されている。Thunberg『ヨーロッパ、アフリカ、アジアの旅』(1788/93年)も、1792/94年にスウェーデン語からドイツ語へ、1794/96年にはフランス語へ翻訳されている。Montanus、Kaempfer、Thunberg の三著はいずれも大著であるが、出版後程なくして複数の外国語訳がでていう事実は、日本についての新しい情報がヨーロッパでいかに熱心に求められていたかをよく物語っている。

なお、これらの文献が出版された当時の日欧関係についてごく簡単に述べておきたい。1549年にイエズス会士 Franz Xaver (1506-1552) が鹿児島に上陸して以来、1593年にはフランシスコ会が、1603年にはドミニコ会がそれぞれ日本で伝道を開始したが、1613年のキリス

ト教禁教令と1614年のキリスト教徒追放令によって、日本でのキリスト教信仰は根絶に近い状態となった。Vaz Douradoの世界地図（ゴア、1568年）とCouto（1542-1616）『アジア』（リスボン、1612年）、イエズス会の書簡集は、イエズス会が相当の情報を入手できた禁教以前の時代を背景にしている。他方、通商面では、1567年にポルトガルの商船が長崎に入港して以来、1584年にはスペインとの、1609年にはオランダとの、1613年にはイギリスとの交易が始まり、順次貿易相手国が拡大してきた。Arthus『東洋のインド 第9部』（フランクフルト、1612年）は、まさに日蘭交易の発端を記録した文献である。しかし1623年にイギリスが日本貿易から撤退したのを皮切りに、1624年にはスペインとの、1639年にはポルトガルとの貿易が幕府によって禁止され、周知のようにヨーロッパ諸国内ではただオランダ一国とのみ通商関係を保つことになった。従って鎖国以後、日本に関する一次情報は「オランダ人」の残した記録類しかなく、その「オランダ人」も、年1回江戸参府のために旅行する以外は、出島を出ることはできなかったので、情報の種類は非常に限られたものであった。そんな中でオランダ商館の医師として来日したドイツ人Kaempferは、通詞の協力を得て、日本語文献から得た多量の情報をヨーロッパに伝え、同じく商館の医師であったスウェーデン人の植物学者Thunbergは、時代状況に助けられて、出島の外に出ることも許されていた。

## 2 東海道筋の宿場町

伊勢地方についての記載の多くは、東海道筋の宿場町に関連しているか、または神道についての解説文中に出ているが、これは禁教令発布以降ヨーロッパ人の行動範囲が厳しく制限されていたことに加えて、彼らの関心が日本の全体像を捕らえることに向けられていたのであるから、当然の結果だと言えよう。それ以外の記載箇所を見ると、日本の諸国名を列記している場合や人物の出身地を挙げる場合などに、伊勢や伊賀といった国名が記されているに過ぎない。ただし、行動に自由度の大きかった時代のイエズス会士たちによる書簡集では、様相が異なる。イエズス会士たちは信長・秀吉時代の政情や戦況を熱心に記録し送信しているが、伊勢地方に関しても、長島城主滝川一益 Taquecaua<sup>13</sup> や松島（後に松阪）城主蒲生氏郷 Camofindandono（蒲生飛驒守）<sup>14</sup> などの動向を報告し、伊勢地方の政治的・軍事的情勢が、同地方でのキリスト教布教の見通しとともにヨーロッパに伝えられている。

さて、東海道の宿場町のうち伊勢国に属していたのは、坂下、関、亀山、庄野、石薬師、四日市、桑名の7宿である。Kaempfer以前の文献は、東海道を旅行した人々の記録類に典拠した二次的な文献である。例えば、Arthus『東洋のインド 第9部』は、1609年にオランダ人使節団が通商免許状を得るために駿府の家康のもとに伺候したときの様子を叙述しているが、旅程に関しては、その情報量から見ると、簡単な忘備録を越えない程度の内容しか一次資料には含まれていないことが予想される。

「翌日彼らは土山（Sutsifamma）で食事を取り、関の地藏（Sequinoso）で泊まった。12日に四日市（Jakaz）で昼食を取り、その後バークに乗って小さな湾を渡った。夕方彼らは鳴海（Narmi）に来たが、それは関の地藏から19海里離れている。」<sup>15</sup>

1649年のオランダ人使節団について語るMontanus『オランダ東インド会社の記憶すべき使節団』は、ところどころで本筋から逸れて長い省察を挿入しているのだが、使節団が江尻（Jesare）の宿に着いた箇所で、宿の亭主から聞いた話という体裁をとって、38年前のオラン

ダ大使節の旅について物語っている。以下に引用するその話は、年代の2年のずれと使節団員の名前の相違を除けば、上記 Arthus『東洋のインド 第9部』の記述に酷似している。

「その翌日、彼は土山 (Sutsifamma) で昼食をとり、関の地蔵 (Sesquinoso) で泊まった。ここから彼は四日市 (Jokeits) へ向けて旅をし、そこで船に乗って宮 (Mia) に向かい、夕方に鳴海 (Narromi) に着いた。」<sup>16</sup>

地名の表記方法も類似しているところから見て、Montanus が Arthus を典拠資料の一つとして利用した可能性が考えられないだろうか。

地図の上を旅行しているようなこの2点の文献に対して、実際に東海道を馬や駕籠で旅行した Kaempfer や Thunberg による記述は当然のことながら全く異なる。周知のように、オランダ商館長は1633年以來毎年(後には隔年)自ら江戸へ出向き、将軍に拝謁し贈答しなければならなかったが、その際に二人のオランダ商館員が随行した。Kaempfer と Thunberg もそうした随行員の一人として商館長の参府旅行に加わり、それによって出島の外を見る唯一の機会に恵まれたのであった。都から江戸までは往復とも東海道が利用された。

まず Kaempfer『日本誌』から、坂下村と関の地蔵間の記述を引用しよう。

「坂下村は約一〇〇戸で旅館がたくさんあり、大へん豊かで、伊勢国の最初の村であり、快適な土地を占めている。ここに開け放しになっているお堂があり、いろいろな病気や災難を防ぐのに用いる薄く小さな板切れがたくさん用意してあった。その板切れには、人をひきつける神聖な文字が書いてあり、何文か払ってそれを買うことができる。われわれは茶を飲んでから、再び馬に乗って進み、十五分後に沓掛という小さい村に着いた。ここでは、この地方にたくさんできる焼栗と煮たココロの根を売っていた。ここからわれわれはよい道を進んで四五分の後に関の地蔵に着いた。約四〇〇戸の村で、ほとんど至る所で皮をむいたアシからたくさんのだいまつ・草鞋・すげ笠その他の品物が作られ、子供たちはそれを持って街道に売りに出て、買ってくれとしきりに頼むので、旅行者は大へん迷惑である。」<sup>17</sup>

Kaempfer の記述の特徴は、その「人文主義的」な観察態度、すなわち、Kaempfer 自身の判断や評価は差し控えておき、観察した個別現象や事物を次々と羅列していく態度にある。道中で目撃された事象は、ビデオカメラで録画しつづけているかのように時間軸に沿って順次取り上げられ、距離を置いた没個人的な視線によって観察され、まるで自律したものであるかのように相互に並列的に提示される。その結果、鋭く精確な観察に基づく詳細な記録文書が生じ、その資料的な価値は言うまでもなく高い。

それに対して Thunberg の地誌的な記述は、Kaempfer 以前の文献のように、至って簡潔である。

「夕方近く、伊勢地方に入った。今日、幾つかの村を通り、ようやく関町に到着し、宿をもとめることができた。」<sup>18</sup> 「今日、我々は日本の約一〇里を旅した。野尻、亀山、森下、そして庄野を過ぎて、石薬師で昼食をとった。そして午後には杖衝、追分、相当大きな町の四日市、富田、そして松寺を過ぎ、湾近くの桑名という名高い大きな町に到着した。」<sup>19</sup>

Kaempfer は戸数、町割り、産業などの地誌的な項目を満遍なく取り上げて記録したが、Thunberg が観察し記述する事項は、彼の関心事に偏り勝ちであり、例えば日本人の清潔さや道路の清掃状態の良さ、子供の健康状態の良さといった公衆衛生に向けられている。それはそもそも Thunberg が、ヨーロッパが見習うべき特色を日本社会から探し出そうという姿勢でいたためである。<sup>20</sup> 衛生状態だけ取り出せば、医師としての Thunberg の評価には十分な根拠が

あったとしても、彼がそこから一足飛びに日本の啓蒙された政治体制という結論を導き出し、ヨーロッパ社会の政治的モデルとして理想化したとき、Thunbergの政治的感性は医学的な観察眼より素朴に過ぎたと言える。ところで公衆衛生に関して、Thunbergは伊勢地方で残念ながら例外的な事実を発見している。

「四月十六日、伊勢地方は密集して人が住み、豊饒でかつ人口が多い点で、昨日までの旅に比べて、当地が不愉快であったということは決してなかった。そこでは、道路に沿って広がる良い村々を通過したが、村は互いに僅かに離れているだけであった。しかしながらこの村を行く時も、楽しみどころか、そこかしこで苦渋をもたらすような困難に堪えねばならず、たいていは乗り物の窓を閉めたままにしておかざるを得なかった。各家に不可欠な私的な小屋〔訳者注 厠〕は、日本の村では住居に隣接して道路に向けて建てられている。その下方は開いているので、通りすがりの旅人は表から、大きな壺の中に小水をする。壺の下部は土中に埋められている。尿や糞、また台所からの屑類は、ここでは耕地を肥沃にするために極めて丹念に集められているが、暑熱下にしばしばそこから非常に強く堪え難いほどの悪臭が発生する。それは鼻にどんな詰め物をして防ぎきることはできないほどの、またふんだんに香水を使いこんでもまったく無駄なほどの悪臭である。この経済性の高い日本人の分室は、どこでも非常に役立つ有益であるが、また一方、彼らの目にはとりわけ有害であることがわかった。というのは、そこから発散される蒸気に国民は徐々に馴化してしまっているが、それは目を強く刺激し、大勢の人々とくに高齢者はそのために目が真っ赤になり、痛み、そして目やにを出している。」<sup>21</sup>

糞尿や生ゴミを堆肥化して再利用する循環型システムの効率性を評価する一方で、それが温暖な地方で引き起こす公衆衛生上の弊害を指摘している。堆肥の悪臭と眼病の多発の間に因果関係が成り立つのかどうか、疑問が残る。ただ衛生状態が良かったにも関わらず、病人は多かったらしく、Thunbergは道中で診察したことも記している。

「他の場所でもそうであったが、ここでも〔引用者注 水口〕いろいろな地域から病人がやってきた。自分の慢性的な病気について、オランダ医師から何か良い治療法を聞いたり、薬を貰うためである。彼等の病気はたいてい腺が腫れて硬化していたり、癌腫であったり、または性病の症状を呈しており、その症状は一般に非常に進行していた。」<sup>22</sup>

再度Kaempferに戻れば、Kaempferもオランダ商館の医師であったが、伊勢地方で土地の民衆を診察したという記録を残していない。馬上のKaempferはあくまでも地誌学者であり、比喩的に言えば、観察する目と記録する手になっていた。次の引用に見るように、Thunbergのように触覚（病人の診察）や嗅覚（厠の悪臭）が伊勢地方との接点になることはなく、ただ視覚だけがKaempferの異文化体験の手段にならざるをえなかった。

「例の通詞はここで〔引用者注 四日市〕またしても、われわれに対して誤った見解を示した。彼はわれわれに近づいて来た伊勢参りの人たちに、おまえたちが汚れるといけない、と大きな声で呼びかけ、オランダ人には用心するように注意した。」<sup>23</sup>「次の村は追分で、ここで人々が糞尿を入れる肥溜めを掘る作業をしているのに出会ったが、それは川や丘の近くにある大へんよく耕された田畑に肥料をやるためである。」<sup>24</sup>

通詞によって伊勢参りの人たちとの触覚的な接触が制限され、まだ建設中の堆肥置き場からは悪臭が漂ってこない。「人文主義的な」観察態度がKaempferを「眼の人」にただけではなく、時代状況のためにそれ以外の感覚器官を使う余地がなかったのかもしれない。

### 3 伊勢神宮

ヨーロッパ人が伊勢神宮や天照大神の名を初めて知ったのは、やはりイエズス会士の通信によってである。1585年8月27日（天正3年8月3日）付の書簡で Luis Frois (1532-1597) は日本の宗教について説明しているが、その中で「神 Camis」の宗派は、大陸から渡来した「仏の宗派」よりも古い日本土着の「偶像」崇拜であるとした上で、次のように述べている。

「無数の神々の間に最上にして最も尊崇せらるるのが三つある。第一は天照大神 Tenxodaigim と称し、太陽に化したと言ひ、その居所〔訳者注 伊勢国〕は、信長が武力によって占領し、本来の領主を除いて己の第二子ゴフォニヨ Gofonio〔引用者注 茶筌丸本御所〕をその王とした。日本諸国より巡礼としてこの主なる神のもとに集る者の非常に多いことは、信ずべからざる程である。(略) 同所に行かざる者は人間の数に加へられぬと思つてゐるようである。」<sup>25</sup>

言うまでもなく、キリスト教の布教活動を行うイエズス会士にとって、神道と仏教の勢力は最大の障害である。従って、例えば伊賀の領主が「神及び仏を信せず、(略) 殿堂及び坊主等が所有した収入を悉く奪ひ、一包の米をも残さず、悪魔が同地において有せし勢力と信用とを少しづつ失はしめつつある」<sup>26</sup> ならば、あるいはまた松島城主蒲生氏郷が「領内にある約十万人を悉くキリシタンとなす方法を講ぜんと決心」<sup>27</sup> したならば、それは布教活動の大きな成果であり、更なる教徒拡大の可能性を示す好ましい状況としてイエズス会総会長にアピールできたのであるが、同時に伊勢神宮には「日本全国より参拝する者が絶えぬ」<sup>28</sup> ことが報告されていて、土着宗教の神道が実際には仏教諸派の信徒も巻き込んだ隠然たる最大勢力であることが認識されていた。

Frois が驚嘆している伊勢詣での大衆的な広がりについては、元禄期の Kaempfer や田沼時代の Thunberg もともに言及している。例えば Kaempfer は、「神道信奉者でない仏教徒でも、愛国者と呼ばれたために、生涯に何回かこの祖神の神社にお参りする者が大勢いる」<sup>29</sup> というような、ほぼ Frois と同内容の報告を書き残しているし、Thunberg も同じく、「なかでも国の二、三の寺社は特に注目されており、あたかもイスラム教徒がいつもメッカを訪ねるように、国のあらゆる地方からそこへ向けて遍路の旅が行われる。特に伊勢神宮はその一つであり、(略) 老若男女を問わずすべての信者は、少なくとも一生に一度はここへの旅をする義務があり、そして多くの信者は毎年ここへ来る」<sup>30</sup> と記している。もっとも Thunberg は先の文に続けて、「それでも上流の人々はほとんど来ていない。つまり他の国におけるのと同様、日本でも義務より個人の都合に合わせた流儀が作られているのである」と書き足し、自分の意見や判断を表明することを忘れていない。

江戸参府紀行の場合と同じく、伊勢神宮や神道についても、Kaempfer と Thunberg の調査・記述の仕方は異なり、そこに両者の学問的な特徴がよく出ている。まず Kaempfer の場合、専ら文献中心の研究方法を採り、通詞の助けを借りて読んだ日本語の資料を引用したり、通詞から聞いた話を書き取ったりしている。<sup>31</sup> 文献やインフォーマントからの引用が中心なので、情報量が豊富でしかも多岐に渡り、結果的に見れば、Kaempfer の報告が Thunberg に至るまでのヨーロッパにおける最大の情報源となった。Thunberg もまた何ら新たな情報を加えることができなかつたし、そうする必要もなかつたのである。

Kaempfer『日本誌』第3巻第4章「参宮すなわち伊勢参りについて」は章全体が伊勢詣で

をテーマにしているが、その記載内容は、伊勢神宮社殿および境内の様子、伊勢詣りの意義・時期・参拝者、伊勢詣りと不浄、参拝の順序、祓箱、内宮外宮の詳しい記述、参拝の順序となっている。同じテーマが繰り返されているのは、Kaempfer が聞き書きと文献からの引用という二つの情報源から得た内容を、そのまま並記しているからである。この内容の幾つかが後年の文献の典拠資料になっているので、以下に社殿と不浄に関する説明の一部を引用しておきたい。

まず社殿について Kaempfer 『日本誌』には次のような記載がある。

「伊勢神宮は、平地に建っており、木造の低い粗末なお宮であり、屋根は非常に低く、藁か茅で葺いてある。(略) このお宮には、社殿の中央に日本流に鑄造した金属を磨き出して作った大きな円鏡があり、ここかしこ壁に紙四手を付けた注連縄を張ってある以外、何の飾りもない。この鏡は、ここの祭神がすべてを知っており、はっきりと見ていることを示し、この注連縄は、そこが清浄無垢な場所であることを示すと同時に、参拝者に対して、同じように心身を浄めて神の御前に現れるようにとの注意を与えているのである。」<sup>32</sup>

Claudius は「日本の皇帝との謁見に関する報告」(1778年) という架空の旅行報告を書くことで、当時の宗教論争に一石を投じているのだが、その作品中で Kaempfer を旅の同伴者に仕立て上げて信憑性を増し、また「予約注文者諸氏への講演」(1778年) の中でも、ドイツ語版『日本誌』(1777年) から宗教上の類例を引き出して、神学論争を有利に運ぼうと試みている。社殿を描写した上記の箇所も、「予約注文者諸氏への講演」の中で引用に近い形で利用されている。

「彼らが巡礼する社は平野にあり、小さく質素な木造建築で、大変低い藁葺き屋根を載せている。内部は、中央に置かれた金属製の鏡以外には何も見当たらず、壁のあちこちには白い切り込まれた紙片が見られ、社の背後には「聖霊」のための小さな礼拝堂がある。鏡は天照大神の全知を暗示し、白い紙片はその場所が清浄であり、その場に近づこうとする者は無垢な心を持っていなければならないということを示している。」<sup>33</sup>

ちなみに、『日本誌』の同巻同章に「18 図 伊勢の天照大神の社」と題して、伊勢神宮の境内を示す1枚の銅版画(図1参照)が挿入されている。これは、Kaempfer によって日本から持ち出された『諸国名所図会』を利用して、編集者 Scheuchzer が作成させた図であるが、Scheuchzer は誤って吉田神社を描いた絵(図2参照)を下絵として使用している。<sup>34</sup> 『諸国名所図会』50枚の内に伊勢神宮を示す図は含まれていない。吉田神社も「木造の低い粗末なお宮であり、屋根は非常に低く、藁か茅で葺いてある」故に、Scheuchzer が伊勢神宮と取り違えたとしても不思議はない。もっとも『諸国名所図会』各図の裏面に、Kaempfer の通詞によっ

### この箇所の図版は著作権の 関係で削除した

図1

図2



て、描かれた場所の名前が記入されていることを考え合わせれば、Scheuchzer はわざと誤用したのかもしれない。何らかの近似的な図を示すことで、ヨーロッパ人の想像力に方向性を与えるためである。

次に不浄に関して言えば、伊勢神宮にとって不浄なものとして、Kaempfer は死、血、肉食を挙げている。<sup>35</sup> 例えば、「忌みに服している者」や「死人を扱い死体を処理するなど不浄な仕事を職業にしている」「尸俱」は不浄な者であり、伊勢神宮に参拝したり、伊勢参りに旅立った者の家に足を踏み入れたりしてはならない。また、血は人を7日間不浄にするという一般的な説明をした後で、伊勢神宮に関わる次のような報告を記している。

「お宮の建築に従事している際に怪我をした者は、その咎により、爾今神社のような神聖な場所で仕事をすることを許されない。そのような事故が、天照大神を祭っている伊勢神宮境内の建物の建築ないし修理の際に発生すると、その建物は血で穢されたということになって取り毀される。月経中の女は、お宮に近づくことを許されない。お伊勢参りをする女達は、道中月のものを見ないと、まことしやかに語られている。恐らくそれは退屈きわまる長の道中ということのためにたまたま起こった自然現象か、あるいはこのような長道中のお伊勢参りを無駄にしまいとする作り話であろう。」<sup>36</sup>

フランス啓蒙主義の Argens 『中国書簡』(1739/40年)も、Claudius と同様に、宗教論争の具として『日本誌』を利用したが、ここでは日本はカトリック的ヨーロッパの悪しき状態を写し出す鏡と見なされている。例えば「第64書簡」では神道の浄・不浄がテーマになっているが、神道での捉え方は幾つかの外面的・形式的な行為の禁忌と関わっているに過ぎず、悪徳、放埒、無節操などの倫理的な要因を顧慮していないとした上で、更に詳細な説明をするために Kaempfer 『日本誌』から数節を引いている。その一部は以下の通りである。

「自分自身の血あるいは他人の血でわずかばかりでも汚れたならば、その者は七日間不浄つまり清潔でなく、神聖な場所を訪れる状態にない。宮あるいは社を建てる時に労働者が怪我をして、体のどの部分であれ、血が傷から流れ出ると、それは大きな不幸と見なされる。それは非常に重大な結果を招くと考えられて、その労働者はこれによって神聖な建物の建築に従事することがまったくできなくなる。伊勢の天照大神の社の一つを建てるか、または修復するとき、こうした偶然が起こると、これは単にその労働者自身だけの大きな不幸ではなく、社も取り壊されて、新しく建て直されねばならない。婦人が、毎月の変化を持つ時期に、社に行くことは許されない。伊勢への巡礼の間に過ごす期間中、この自然の変化は婦人から全く離れていると信じられている。それが本当だとすれば、長く骨の折れる旅の苦労か、むしろ彼女たちが、我が身に引き受けた苦労と使った旅費が全く無駄になるかもしれないという恐れから、自然の変化を念入りに隠す習いのせいだとしなければならない。」<sup>37</sup>

Argens によるこの引用が、先程の第3巻第2章「神社、信仰および参拝について」からの一節であることは言うまでもない。Argens は、神道の禁忌が不合理で愚かな「迷信的な規則」<sup>38</sup>であることをあげつらうことによって、同時に神道をヨーロッパ批判のなかへ引きずり込み、例えばカトリックの断食のような不合理な慣習に対置している。

最後に、伊勢詣での旅に出た人々の実態を紹介しておきたい。彼らの旅姿もまた、Kaempfer の時代と80数年後の Thunberg の時代とでは何も変わっていないように見える。Kaempfer は江戸往還の旅を2度行ったが、近江、駿河、江戸郊外、伊勢国の東海道筋で伊勢参りの人々に出会ったことを記載している。

「食物や路銀を道中物乞いして得なければならぬような者が大勢おり、江戸へ参府の旅行をする人々は、次々にそのような物乞いに出会い、冠りものを脱ぎ、憐っばい声を出し、「お通りがかりの旦那様、伊勢参りの者に路銀を1文お恵み下さい」と言って頭を下げる。」<sup>39</sup>

Thunberg も全く同じことを観察し記録している。

「私は江戸参府の途上で、無数のこのようなお遍路さんを見たが、途中で物乞いをしながらでしか旅を続けられないほど、みじめで貧しい人が多かった。この貧しい人々は、国の習慣にしたがって自分の寝具を持っていた。とはいっても藁むしろを背中にかけていたにすぎない。また大部分の人は椀を持っている。それで水を飲み、かつそのなかに喜捨を受ける。この椀には名前が書かれていた。旅の間に不幸にも事故死や自然死をしたような場合に、そのお遍路さんが誰なのかわかるようになっているのである。」<sup>40</sup>

ヨーロッパの文献を見る限り、伊勢地方を巡るすべては80数年間ほとんど変化していないと言えそうである。

## 注

- 1 Kapitza, Peter: *Japan in Europa. Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt.* Bd. 1, 2 u. Begleitbd. - München: iudicium 1990.
- 2 Kapitza, a. a. O., Begleitbd, S. 7.
- 3 本稿では、伊勢地方という表現によって、伊賀、志摩、東紀州を含めた現在の三重県全体を指すことにしたい。
- 4 索引に掲載された地名は伊賀、伊勢、熊野、桑名、関・関の地蔵、志摩、鳥羽、四日市である。同書には抜粋の形で収録された資料も多く、従って伊勢地方に関連する記述の量は、本稿で紹介しているよりも多いと思われる。
- 5 これは、François Caron『強大な王国日本についての本当の記述』（1661年）のドイツ語訳に、Christoph ArnoldがMontanusやイエズス会士の書簡、その他の旅行記などに基づく詳細な脚注を付けたものである。注記の中に桑名の記述があるので、原典ではなくドイツ語訳の方を取り上げた。
- 6 これも、Alexander Ross『創造から現在に至る世界の全宗教展望、あらゆる周知の異教の発見付き』（1653年）のドイツ語訳に、David Nerreterが詳細な補遺を付けたものであり、補遺の中に伊賀の記述がある。
- 7 引用は、エンゲルベルト・ケンペル『日本誌（改訂・増補）－日本の歴史と紀行－』今井正編訳、上下巻、1989年、及び、ケンペル『江戸参府旅行日記』斎藤信訳、平凡社、1977年（東洋文庫303）による。
- 8 引用は、C. P. ツェンペリー『江戸参府随日記』高橋文訳、平凡社、1994年（東洋文庫583）による。
- 9 引用は、イエズス会『日本年報』上下、村上直次郎訳、柳谷武夫編輯、雄松堂出版、1969年（新異国叢書3、4）による。その索引に従って、天照大神、伊賀国、伊勢の王、伊勢国、亀山、亀山城、長島、長島城に関する報告を参照した。
- 10 Vgl. Kapitza, a. a. O., Bd 1, S. 124.
- 11 Vgl. Kapitza, a. a. O., Bd 1, S. 689.
- 12 Kapitza, a. a. O., Bd 1, S. 656によると、Claudiusは、Scheuchzer編の英訳本（1727年）やその独訳本（1749年）ではなく、出版されたばかりのChristian Wilhelm Dohm（1751-1820）編『日本の歴史と紀行－著者の草稿から』（2巻、レムゴ、1777/79年）を利用した。
- 13 1584年1月20日（天正11年12月18日）付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスよりインド管区

- 長パードレ・アレッサンドロ・バリニャノに贈りし書翰、『日本年報』上 311-321 頁参照
- 14 1585年10月30日(天正13年9月8日)付、大坂発、パードレ・グレゴリオ・デ・セスペデスよりインド地方のパードレに送りし書翰、『日本年報』下 127 頁参照
  - 15 Kapitza, a. a. O., Bd 1, S. 338.
  - 16 Kapitza, a. a. O., Bd 1, S. 698.
  - 17 ケンペル『江戸参府旅行日記』140 頁
  - 18 ツェンベリ『江戸参府随行記』137 頁
  - 19 同 138 頁
  - 20 Vgl. Steenstrup, Carl: *A Gustavian Swede in Tanuma Okitsugu's Japan. Marginal Notes to Carl Peter Thunberg's Travelogue*. In: Kapitza, a.a.O., Bd 2, S. 713.
  - 21 ツェンベリ『江戸参府随行記』137-138 頁
  - 22 同 137 頁
  - 23 ケンペル『江戸参府旅行日記』273 頁
  - 24 同 218 頁
  - 25 イエズス会『日本年報』下 45-46 頁
  - 26 同 42 頁
  - 27 同 48 頁
  - 28 同 46 頁
  - 29 ケンペル『日本誌』上 313 頁
  - 30 ツェンベリ『江戸参府随行記』264 頁
  - 31 Kaempfer は「この神宮に関するこれからの私の記述は、この神宮をその目で見た人の報告によるものである」(ケンペル『日本誌』上 312 頁)、「以下述べる伊勢神宮の位置や現状は、一戸という人の本から引用したものである」(同 316 頁)と述べている。
  - 32 ケンペル『日本誌』上 313 頁
  - 33 Kapitza, a.a.O., Bd 2, S. 663.
  - 34 榊原悟「諸国名所図会」『ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展』(1990-1991年)図録、ドイツー日本研究所他編、111-115 頁参照
  - 35 ケンペル『日本誌』上 298-299 頁及び 314 頁参照
  - 36 同 298 頁
  - 37 Kapitza, a.a.O., Bd 2, S. 389.
  - 38 Kapitza, a.a.O., Bd 2, S. 390.
  - 39 ケンペル『日本誌』下 181 頁
  - 40 ツェンベリ『江戸参府随行記』264-265 頁

#### 図出典

- 1 ケンペル『日本誌』上 317 頁
- 2 『ケンペル展』図録 31 頁